

令和7年度とうきょうすくわくプログラム活動報告

- 1 園 名 学校法人常盤学園 幼保連携型認定こども園 羽根木こども園
- 2 テーマ 「ドキドキわくわく何だろう？不思議だね」
- 3 対象学年 全学年（0歳児～5歳児）
- 4 活動期間 令和7年4月～令和8年3月
- 5 内 容
※写真・動画はHP「すくわく」の覧を参照

(1) 乳児（0歳児～2歳児）特に感触・体験を通してテーマに迫る

① 0歳児

・カーテンの隙間から射す日の光に触れようとしたり、室内につるしたモバイルが風で揺れたり止まったりする動きに視線が集中する姿が見られた。

また、散歩で自然との触れ合いの機会を通して体験を重ねたり、自然物や様々な野菜を準備したり、子どもが五感で何だろう不思議だねと感じた瞬間をたくさん拾ってきた。

本年体験したことが次年度に経験として重なり、気づきや学びの基礎になっていくよう学年を超えて繋げていく。

② 1歳児

・手で触れる、硬さ・柔らかさ・厚さ・つるつるヌルヌル・さらさらガサガサびりびりピリピリ・ぐにゅビヨーンなど、様々な間隔が体験できるよういろいろな素材を準備した。

様々な機会に何度も繰り返し活動できる環境を作ってきたことで、子ども達が興味をもちじっくり感触を味わい、自分で活動を選んで楽しむようになってきた。子どもの興味を次年度に引き継ぎ、興味関心が広がるよう更に環境づくりをしていく。

③ 2歳児

・様々な資材の布に触れ、空気の様な軽さ・ふんわり感・くるまって安心・皆で入ってわくわく・広い布・細い布・長い布・ちぎれる感覚等々、様々な感触を味わった。

また、自分達で拾ったドングリを使って、集めたり・転がしたり・器に入れたり・比べっこすることで、ドングリの動きや音・大きさの違いを真剣に感じ取っていた。保育教諭も大量に集めて子ども達のやってみたいを実現させていった。子どものやってみたい思いを、次年度に繋げていきたい。

(2) 幼児（3歳児～5歳児）

① 3歳児はサブテーマとして「光」を実践した。

・部屋の床に刺す日の光に手をかざして影を映しながら、色水のペットボトルを通して絵の具やナーカー等、色を表す素材の違いで影が異なることに気付くと一気に興味が広がっていった。光を作り出す・光の強弱・光の屈折・色の作り方・混ざり方・光と影・影の屈折など多くの気付きや発見が生まれた。

日々の生活の中に光に対しての関心が高まると共に、すくわく活動を通して「なんでだろう・どうすれば良い」と、考えて工夫する取り組みの姿勢が様々な場面で見られるようになった。こうした取り組みの姿勢を更に高めていく。

② 4歳児はサブテーマとして「色」「植物」を実践した。

・色では画材の大きさや素材や質の違いでの変化や感覚の違い・混ざらない色から水と油の特性の違いに気付き・日本古来の同色であっても微妙に違う色合いを紅葉を通して体験していった。

・植物では食べた果物の種を育てることもきっかけに、野菜や球根など多くの植物を育て、毎日きちんと世話をしながらスコップで茎の中を見たり・植物によって異なる根の違いに気付き・長さを実測、一つ一つの植物に様々な観点から調べたり予測したり観察・実験を重ねていった。すぐに結果が出なくても、毎日続けて活動に取り組んでいた。子ども達はこの取り組みの過程を各々の子どもが各々の言葉で率先して語って聞かせてくれる。今回、得た気付きや学びに誰もが自信をもてたことが見て取れる。自分でやり遂げているこの姿勢を次年度にも引き継ぎ更に深めていきたい。

③ 5歳児はサブテーマとして「光」「食物」を実践した。

・光では、プラネタリウム見学体験から、どうすれば表現できるか。何をどの様に使い・何を映すかなど考え試行錯誤しながら活動が続いた。食物では、芋の形状や太さで糖度が異なるのか・他の食物との糖度差は等、糖度計を使って検証した。こうした姿が節分の豆調査に繋がり、地域や先祖伝来により使う豆や掛け声が異なることを見つけた。

子ども達は、感覚や記憶等の漠然とした情報で判断するのではなく、実際に実験・検証することの大切さと面白さを学んでいた。

この学びの工程が、進学以降人生に役立つことを期待している。

6 成果と今後に向けて

保育教諭にとって2年目の本年は、『すくわくとはいったい何』を課題として模索を重ねた1年目の気づきを基に、環境をつくる（デザインする）ことを理解し手応えを得られた一年になった。

すくわく活動の体験を重ねている子ども達にとっては、探究する心が育ち身に付き始めている。これは、人の話に耳を傾けることや、人の意見や考えに寄り添ったり受け入れたりしようとする姿が増えてきていることで、情緒の育ちにもつながり始めていると考える。

今後は、より様々な活動・子ども達の気づきに敏感に反応し、子どもの好奇心を、受け止め・刺激し・深めていける、環境づくりに率先して取り組んでいく。